

飼育レポート

「モルモット感謝の日」の取り組み

飼育展示担当（動物専門員） 佐藤 有紀乃

7月16日は、モルモットへの正しい接し方や飼育方法の普及啓発を目的とした「モルモット感謝の日」です。モルモット担当3年目となる2026年は、来園者にそれぞれの個性や特徴を知ってもらうことで、モルモットへの理解や関心を深めてもらう取り組みを実施しました。

その1つとして考えたのが「推しモル投票」です。多数の飼育個体の中か

らお気に入りの1頭を選んで投票してもらうことで、ポスターと実際の個体を見比べながら特徴をじっくり観察する来園者が増え、ふれあいコーナーでの来園者の滞在時間が延びたように感じます。また、「モルモットの橋渡し」では、推しのモルモットの名前を呼んで応援する姿が見られ、個体への愛着を持って観察する来園者も増えました。

これらの取り組みを通して、モルモットを単なるふれあい動物としてだけでなく、それぞれ個性を持った一つの命として捉える来園者が増えたように感じています。

「モルモット感謝の日」をきっかけに、モルモットをはじめとするふれあい動物が、私たちに癒やしや学び、命の大切さを伝えてくれる存在であることに改めて感謝する機

会にもなりました。

今後も飼育担当者として、動物への敬意や感謝の気持ちを大切にしながら、それを育めるような取り組みを続けていきたいと思っています。



23頭がエントリー！SNSでの期日前投票と併せて多くの方が参加した「推しモル投票」



「橋渡し」で推しのモルモットに声援を送る参加者



橋渡し後は参加者が盛り付けたごほうびプレートをプレゼント

5年ぶりのコモンマーモセットの繁殖

飼育展示担当（動物専門員） 長谷川 宗



2月に生まれた「たわら（左）」と「おこめ（右）」



大森山動物園で飼育しているコモンマーモセットたちは、以前は同じオスとメスのペアから繁殖した個体ばかりだったので、これ以上繁殖を継続することができませんでした。

しかし、2024年にメスの「モコ」が上野動物園からやってきて、園内で繁殖が再開できる状態になりました。

そこで、2025年7月19日からさるっこ森で、繁殖のためにモコとオスの「もめん」の同居を開始したところ、2026年2月3日に念願の赤ちゃんが2頭生まれました。大森山動物園では

2021年以来、5年ぶりの繁殖です。親が子の世話をちゃんとするかどうか心配していましたが、モコともめんは交代でしっかりと2頭の赤ちゃんを抱っこしていました。授乳の際はモコが赤ちゃんを抱っこしますが、それ以外はもめんが一生懸命抱っこしていました。子も離されまいとしっかりと親の体にしがみついていました。その様子を見て、動物の生きようとする姿に感動するとともに、2頭には心の底から感謝しました。

一度繁殖が上手くいくと繁殖のリズ

ムができるのか、出産の10日後くらいに、モコともめんの交尾が再度確認され、2026年7月8日に、子が1頭生まれました。コモンマーモセットは家族単位で子の世話を協力して行う動物です。2月3日に生まれたお兄ちゃんである「おこめ」と「たわら」も今回から子育てに加わり、2026年8月現在、4頭で赤ちゃんのお世話をしています。



7月に生まれた「あられ（上）」を一家で子育て

カンガルー繁殖への取り組み

飼育展示担当 主席主査 宇佐美 均

カンガルーは、野生では十数頭の小さな群れで生活する動物です。そうした生態を活かしつつ、充実した展示を持続的に行うため、頭数の管理は動物園の重要な役割の一つです。

カンガルーの場合、比較的容易に繁殖し、頭数の確保ができるため、飼育スペースの広さや健康状態、年齢・血縁関係等を考えて繁殖の計画を立てます。

当園では2019年からオスとメスを分けて飼育し、適正な時期に同居を行う取り組みにより、これまで複数回の繁殖に成功しています。

しかし、近年飼育されているオス、



メスカンガルーたち

メス全ての個体が当園生まれとなったため、新たな血統更新が必要となっていました。

そのような中で、2026年5月、横浜市立よこはま動物園より新たなオスの「ロミオ」を搬入することができたため、メスとの同居を行い、繁殖を目指す予定です。

お腹の袋（育児嚢）から顔をのぞかせる赤ちゃんの様子はとてもかわいらしくて癒やされます。今後も一頭一頭が健やかに暮らし、来園者に元気な子どもたちをご覧いただけるように、日々の健康管理に努めたいと思います。



新たに仲間入りしたロミオ



オスカンガルーたち



動物病院から

新人獣医師の日々

飼育展示担当（獣医師） 石川 洋

皆さんは動物園獣医師と聞いてどんなお仕事を想像しますか。私はこれまで、町の小動物病院や外来生物の対策機関に従事し、2026年4月から大森山動物園に勤務しています。これまでも多くの命と向き合ってきましたが、動物園に来て日々感じていることは、動物園は動物の「生」を迎え入れ、「死」を見届け、動物の一生を共にする場所であるということです。そうした動物園で獣医師として働く上では、繁殖から始まり、予防、治療、解剖まで、その動物が生きた軌跡を辿りながら、後世に繋げていく一助になればと考えています。

動物園では注射や投薬が簡単ではない動物が多いため、治療が困難になるケースが少なくありません。そのため、動物を病気にさせないための予防はとても大切です。具体的な取り組みとしては、日々飼育員と協力して定期検査や治療のトレーニングなどを行っています。しかし、それでも病気にかかり治療が必要になるケースも発生します。動物種も多いため、投薬をどうするか、麻酔をかけて処置を行うかなど、それぞれの特性を考慮し、治療方法を工夫する必要があります。そして、そうした工夫も動物園獣医師のやりがいの一つだと感じています。



ゾウのトレーニング



キリンの採血トレーニング